様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ９ 日現在

機関番号：８２６２０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２２５８

研究課題名（和文）黒髪白肌の系譜－上村松園の技法と表現－

研究課題名（英文）Study on the techniques and expression of UEMURA Shoen especially on her portraying beautiful women

研究代表者
大河原　典子（Okawara, Noriko）

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・客員研究員

研究者番号：８０４０１５０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：明治から昭和にかけて活躍した日本画家上村松園の技法と表現について、作品の科学的な分析と下絵および自叙伝の調査からその特徴を明らかにすることを目的とした。
本画２作品を蛍光X線回折、赤外線撮影、顕微鏡撮影を通じて分析したところ、日本画で古くからある顔料と、明治以降新しく使われ出した顔料がともに検出された。また文献資料にある記述と異なり、絹の表からのみ彩色されていることが解った。表現においては同一画面のなかでも人体とそれ以外で技法に意図的な差異があった。作家の原点である縮図帖の分析では、色とモチーフの分類および電子書籍化を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
上村松園の技法と表現の特徴は、モチーフの写生に基づきつつ、松園自身が感じた美しさに焦点をあて、物理的に無理のない一般的な技法を独自に組み合わせて表現したことにあった。それが明治から昭和にかけて数多く描かれた美人画の中で、現在も時代に埋もれない強さの基盤となっていると結論づける。また電子書籍化では所蔵館と協力して調査と公開を行うモデルケースとして、現代的な情報共有方法を提示できたと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the characteristics of the technique and expression of Japanese painter Uemura Shoen, who was active during the Meiji and Showa eras, through a scientific analysis of the works and a survey of his sketches and autobiography. When the two works of this painting were analyzed by fluorescent X-ray diffraction, infrared photography, and microscopic photography, both old pigments in Japanese paintings and pigments newly used after the Meiji era were detected. It was also found that, unlike the description in the literature, it was colored only on the silk surface. In terms of expression, there was a deliberate difference in technique between the human body and other parts of the same screen. In the analysis of miniatures, which is the origin of the artist, we classified colors and motifs and made them into electronic books.

研究分野：絵画技法

キーワード：日本画　技法　美人画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

上村松園が活躍した近代日本画壇では、西洋絵画の影響と大会場での公募展覧会を発表の場とする新潮流が興り、近世までの絵画と比較して作品が巨大化した。巨大化した画面に対応するように新しい材料、技法、表現が生まれたと考えられる。しかしこれまで、その新しい技法表現に関する学術的な研究はほとんどされてこなかった。近年、荒井経氏の研究（科研 2008～2010 年『日本画と材料-近代に見いだされた岩絵の具と和紙』東京藝術大学）により、日本画材料が 20 世紀初頭に変革期を迎えていた可能性が指摘された。しかし、描画材料のみにテーマを絞った研究が多く、実際に絵具を扱う技術と表現の関係性を主眼にした研究はまだ行われていなかった。また上村松園については、京都画壇、女性画家、美人画をキーワードとした研究はなされているが、彼女独特の技法と表現について実技的側面から言及されることはほとんどなかった。

２．研究の目的

明治から大正期の日本画材について少しずつ新知見が蓄積される中で、同時代の中核となる画家、上村松園の技法材料とその表現を調査分析し、芸術性を技術面から解明する必要性を大きく感じるようになった。また、技法や表現を解明するには、画材の科学的な分析に加えて、日本画実技に立脚した技法の実証実験による結果を集積することが重要であると考えた。そこで、数多く残されたスケッチ、模写帖、下絵および本画作品について実技的側面と科学分析の両観点から調査し、技法材料の同定、絵画構造、表現効果を検証すること、その結果を統合した画像情報データを作成し、松園作品の技法と表現について解明することを目的とした。

３．研究の方法

（１）縮図帖の調査分析

松柏美術館で保管されている松園のスケッチ集やアイデア帖と言われている縮図帖のうち 7 冊を対象として、文献資料や大量のスケッチ、下絵に書き込まれた色彩に関する記述を調査分類する。模写帖から松園が模写した作品の原本を推定し、本画への影響を検証する。必要に応じて、松園の師匠である鈴木松年、竹内栖鳳の作品を調査し、松園への影響について比較検討する。

（２）本画に対する科学的なアプローチと実技技法に基づく分析

本画を科学的手法によって分析し、使われた絵具、基底材の絵絹、使用方法を検証する。文献資料と科学分析結果、日本画の実技技法との照合を行い、用いられた表現効果、混色、重ね塗り、暈しなどについて実技的見地からの分析を行う。また他の作家と比較して松園表現の独自性について知見を深める。

（３）デジタルデータとして集積

調査作品の詳細な分析情報を、作品ごとに閲覧可能な形式で、画像のデータベースとしてまとめる（画像情報のデジタルデータ化）。これらの結果を、文化財保存修復学会、美術史学会、大学内での講演、海外在住修復家対象ワークショップなどで公開する。今後松園の展覧会が開催されるにあたっては、所蔵館と研究成果を共有し成果を公開する。

４．研究成果

（１）本画調査結果

①「焔」（1918 年）東京国立博物館所蔵

「焔」からは水銀（朱）や銅（緑青）など古くから用いられてきた顔料のほかに、クロムやケイ素などが検出された。これらは江戸後期か明治に入って新しく用いられた顔料で、人造絵具の一種と思われる。これらの色は黄緑や薄紫で彩度、明度が中程度の曖昧な色味に多く用いられていた。黄緑や紫は明治後期から使われ出した新しい顔料に依っている可能性が高く、松園が新しい材料を取り入れていたことがわかる。顕微鏡撮影で確認した技法としては艶墨を用いて瞼、黒目、お歯黒を光らせていること、白目部分に金泥を用いるという松園独特の質感へのこだわりが感じられた。裏彩色を行った様子は見られなかった。また絵具層は薄く、絹目が露呈するほどながら、美しいグラデーションが作られている様子も見られた。作品発表時の文展図録画像（図１）と比較したところ、今回銀が検出された蜘蛛の巣（図２）部分が黒く変色していた。

図1第12回文展図録

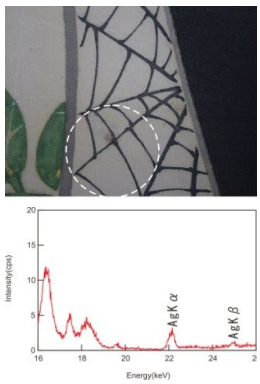

図２　衣裳・蜘蛛の巣部分

②「花嫁」（1935 年）JR 西日本奈良ホテル所蔵

「花嫁」は、主に帯部分の黄緑からケイ素やクロムなどが検出された。赤色から検出された元素は１種類だが、目視認識では５種類ほどの違いがあった。図３のこめかみの髪の生え際部分では、顔の白色グラデーションからほぼ絹地に移り変わり、そこから具墨や艶墨で髪の描き起しを行っている様子がうかがえた。また部分的な凹凸の再現にもこだわりが感じられ、びらびら簪（図４）や綴れ織り風の帯にその特徴があった。彩色技法では、色相の変化より絵具の厚み変化によって空間を意識させていることが感じられた。

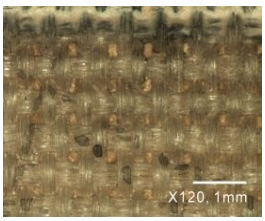

図3　生え際部分

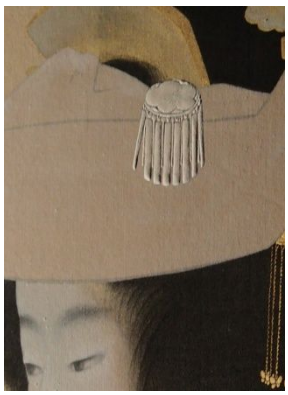
図4　部分的な絵具の盛上げ表現

２点の本画作品調査から、人体の表現では、水分を多めに溶いた絵具を薄く塗重ねて繊細なぼかしを多用し、地肌と化粧の白さから黒髪へ柔らかな移ろいをみせ、要所にぼかさない艶墨、具墨を用いて対比させ画面を引き締めていた。人体以外のモチーフには、微妙な凹凸や艶への再現に注意が向けられていること、絵具層の厚み関わらず裏彩色が行われていないことが判明した。特に手にとって眺めたように細やかな表現がされたかんざしや着物の各部分からは、美しい小物や着物への強い愛着が感じられた。

（２）縮図帖の分析とデジタルデータベース化

松柏美術館所蔵縮図帖７冊について、すべての文字を書起こし、描かれたモチーフを分類し、模写については原本の特定をできる範囲で行った。多くが墨のみを用いているためか、色合いに関する描込みが多く、松園が色に高い関心を持っていたことが解った。描き込まれた色名で数が多かったものは赤、白、黒であることが伺えた。これらは電子書籍形式につくり（図５）、書き込まれた文字の現代語訳、日本画用語訳および縮図帖画像の拡大表示やモチーフ検索ができるようにした。

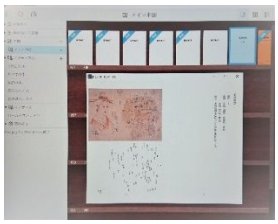
図5　電子書籍画面

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 大河原典子
２．発表標題 上村松園筆「焔」（東京国立博物館蔵）の技法と表現
３．学会等名 第40回文化財保存修復学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	宮廻　正明 (Miyasako Masaaki) (40272645)	東京藝術大学・学内共同利用施設等・教授 (12606)	
研究分担者	高林　弘実 (Takabayashi Hiromi) (70443900)	京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・准教授 (24301)	